

が成り立たないのではないかと?」。2007年、アメリカへの女性移民の割合は、同国への移民人口全体の51パーセントに上りました。そして、彼女らの役割は、これまでの男性のものと違うことが判明しました。ところが、健康保険の欠如をはじめとする移民を取り巻く課題は、女性だけではなく、男性にも当てはまるものです。そう考えると、移民全体を支援する運動ではなく、あえて女性と男性を分け、女性による運動の必要性を訴えることに対し疑問がわくのも、納得がいきます。彼女の質問に対してあるパネリストは、「確かにそうだが、家の外に出て働くことのない女性の数は多く、彼女らを組織しなければ運動の効果は弱くなる」と答えました。また「女性支援組織は、移民支援組織よりももっとパワフルだ」とも述べて、女性による運動の必要性を重ねて強調しました。

私としては、「ジェンダーの視点から移民問題を見直すことで、査証なしの女性移民に対する性的虐待に光を当てることができる」、というパネリストの議論を聞いてから、女性の権利擁護団体による運動も必要だと考えています。しかし、先の質問をした女性の発言が、パネリストの議論における論理の綻びをつくものであったことも確かです。パネリストの議論にただただ納得させられていた私は、彼女のようなクリティカルな視点を欠いていたことに対して、悔しい思いがしました。

人を動かす文章

デイリーサン紙面には、広告主の企業が提供する商品やサービスを紹介する、「かわら版」というコーナーがあります。マンハッタンのとある寿司レストランの取材を任された私は、人を動かす記事を書くことの難しさを再認識しました。

同店は、オーナーもシェフも日本人ではありません。取材の際に客層をたずねると、日本人の占める割合は全体の約5%だといえます。私の使命が日本人客を増やすことにあるのは明らかでした。メニューは巻物と刺身が中心で、ドリンクにはユニークなカクテルが多数揃っていました。オーナーは今回の記事に関して、おススメメニューの紹介を希望しました。そして、「単なる寿司バーとしてだけでなく、パーティー会場としても使ってほしい」と述べました。同店は、プライベートルームやガーデン席を用意し、日曜と月曜以外はDJを招くなど、雰囲気作りにも力を入れています。おススメメニューを試食したところ、独自の巻物はおいしく、また値段もそれほど高くはないため、日本人を魅了するだけの潜在能力はあるのではないかと感じました。

しかし実際に記事を書こうとすると、「どうしたら日本人を引きつけることができるのか」がとても難しい問題でした。というのも、もし巻物の味を強調したとしても、日本人が寿司を握る店舗がニューヨークに山ほどある中で、外国人シェフの寿司を食べに来る客はそういないのではないかと考えられたからです。ところが

逆に、メニューよりも雰囲気の良さばかりをうたったら、お寿司には自信がないと思われてしまい、日本人は食べに来ないのではないかと考えられました。

デイリーサンの読者は、2008年4月の時点で、主な年齢層は30代が40%、40代が24%、20代が16%、50代が14%、60代が5%、10代が1%でした。もし20代の学生や会社員に狙いを定めて記事を書くとしたら、雰囲気の良さを強調した方が効果的かと思いました。しかし最終的には、「雰囲気が良くパーティーにも適しているが、実は巻物も非常に魅力的である」、という事実を強調することにしました。なぜなら、その方が20代以上の年齢層を取り込むことが期待でき、客数を伸ばせるのではないかと考えたからです。とりわけ巻物にこだわり、ユニークながら満足のいく味を提供する点は、日本人の寿司職人にはあまり見られないことから、同店の強みになりうるとも感じました。

現時点では、この「かわら版」の記事がどのような結果をもたらすことになるのかは分かりません。私はこの記事の執筆を通して、説得力のある文章の難しさを改めて感じました。しかし今思えば、私の辿った思考過程は、あなたが間違いないようにも感じられます。「人を動かす文章を書くために、読者が誰であるかを理解し、それによって書き方を変えること」。これは、松本先生と山田先生が、早稲田大学の授業で「説得的な文章の書き方」として教えて下さったことと通じるところがあるからです。今後、この「かわら版」の記事がどれだけの人を動かすことができるのか、注目していくつもりです。

最後に

インターンを始めてから、自分の弱点がいくつも明らかになりました。話す技術や仕事の速さなど、自分の至らなさにうんざりする場面が多くありますが、中でも今回取り上げたクリティカルな視点の欠如は、ジャーナリストを目指す上では大きな問題となります。そのため、インターンの残りの期間では、特にその改善に取り組むことで、変革を続けていきたいと思います。

なお、私の留学日記は今回が最後となります。稚拙な文章にもかかわらず、これまで読んで下さった方、どうもありがとうございました。

この原稿は8月末に受取っていましたが、編集の都合で掲載が遅れました。お詫び申し上げます。



留学の後のインターンでも、宇野君は多くのものを学んでいます。この1年間で「自己変革」の時期として、積極的に行動し考えた軌跡が、この最後のエッセイにはっきりと表れています。

宇野君、1年間、貴重な体験記を寄稿していただき、ありがとうございました。帰国後も「自己変革」を続けて、より大きく成長してください。早稲田のクラスでの再会を楽しみにしています。

